



令和2年6月

スクールカウンセラー 中野隆治



「新しい時代」



長い自宅生活から解放され、やや変則ではありますが、久しぶりの学校生活が始まりました。ただ、あまりにも在宅期間が長かっただけに、最初、久しぶりに出会う全ての物に多少の違和感を覚える人もいないのでしょうか。建物だけでなく、環境に、友人や先生にまだなじみにくく、どこか孤立してしまいがちそうな心配を抱く人もいられるかもしれません。全く逆の心理も想像されます。それは、空白期間の長期化がもたらす、物事への期待感です。久しぶりに会いたかったからこそ、たとえば、これまでの人間関係や、学校と自分の距離感や嫌悪感などが、初期モードにリセットされる働きも考えられるのです。心の中を白紙にして、学校生活を続けて行くチャンスだとは思いませんか。

ただ、緊急事態宣言が解除されたという解放感が、自分でも予期しえなかったリバウンドに向かうことを恐れます。もうコロナのことをそれほど気にしなくていいという楽観的な生き方を慎んでほしいと思います。日本人は本来、慎重な民族で、ある程度の我慢もでき、守るべきは守るといふ几帳面さも持ち合わせているようですが、残念ながら、気が変わりやすい移り気な一面もあるような気がします。さあこれからだと思って、遊ぶ解放感にうつつを抜かす日々はないようにしてほしいと思います。

フランスのノーベル賞作家アルベール・カミュは、小説「ペスト」の中で、さながら今のコロナのように荒れ狂うペストの猛威に対して、人々とともに必死に戦う主人公の医師に、ある人から「ペストをなくすにはどうすればいいのでしょうか。」と聞かれ、「誠実に生きることです。そして、やらなければならないことをやるだけです。」と答えさせています。この言葉は、今の我々の生き方を示唆しているように思います。今、我々は、誠実に、それぞれ自分のしなければならないことをしていけばいいのです。そうすれば、コロナの時代は遠からず終息するに違いありません。

誠実に生き、やらなければならないことをやる……これはみなさんにも言えることではないでしょうか。今みなさんがやらなければならないことをやる……それは、不自由ながらも、今の学校生活、学校外での生活に真摯^{しんし}に向き合うことではないでしょうか。

新しい時代が始まったと思ってほしいのです。楽観すぎず、悲観的にならず、明日を切り開く^す勇気と誠実さを中心に据えて、どんなことにもたじろがない生き方をしてほしいと思います。